

『城の崎にて』と倫理

－「死生観」との関わりを中心に－

金 青 均*

目 次

【はじめに】

第一節 「蜂の死」と『范の犯罪』との対比にみる死生観

第二節 「鼠の死」と「蠐螬の死」にみる死生観

【結び】

【はじめに】

志賀直哉は、大正3年4月、『兒を盗む話』を雑誌『白樺』に発表してから約3年間、文學的沈黙期に入る。志賀の作家としての活動は、大正6年5月、『城の崎にて』を雑誌『白樺』に、また、同年6月『佐々木の場合』を雑誌『黒潮』に発表することによって再開される。さらに志賀は、同年9月、父との和解を達成し、10月には父との和解の顛末を作品化した『和解』を雑誌『黒潮』に発表している。このように『城の崎にて』は、志賀の文學的生涯の中では、約3年間の文筆活動の休止期を終え、新しく旺盛な作家活動に入ることになった最初の作品である。そして何より注目されるのは、この作品から傾向の変化がみられるという点である。多くの志賀研究者たちは、『城の崎にて』以降の志賀の作品傾向を「調和的傾向」と呼んでいる。

『城の崎にて』の先行研究においては、まず、『城の崎にて』の表現や文体に注目しているものが多いことを指摘することができる。谷崎潤一郎が、『文章讀本』の中で、『城の崎にて』を「簡潔な調子の名文」として絶賛して以来、その表現の特性について、多くの研究者が言及している¹⁾。しかし、言うまでもなく基本的に、『城の崎にて』の作品分析の重点は、作品の

* 高麗大學校講師、日本近代文學

1) 『文章讀本』、『谷崎潤一郎全集』第二十一卷、中央公論社、1968年、177-180頁。

例えば、饗庭孝夫は、『城の崎にて』の冒頭の文章について、「この文章には主語がなかなかあらわれず、動詞、あるいは受身の動詞によって不在の主語、隠れた主語の行爲が説明され、はじめて〈自分はよく怪我の事を考へた〉にいたって主語があらわれる」と言う。（饗庭孝男「〈私〉小説とは何か—日本の心性との関わり—」、『文學界』、1982年2月、165頁）

また、小林英夫は、「主辭を言語的に隠すといふことは、讀者の眼を—或ひは耳を—できるだけ對象それ自体に直接に向けさせて、表現手段への意識を抹殺しようとする志向から發してゐる」と述べる。（小林英夫「文体論から見た志賀直哉」、日本文學研究資料刊行會編『日本文學研究資料叢書 志賀直哉』、有精堂、1970年、129頁）

中にあらわれた、動物の死とそれについての語り手の感想をめぐる解釈におかれている。その代表的な先行研究をいくつか紹介しよう。

須藤松雄は『范の犯罪』との対比を念頭において「城の崎行きの前月に書かれた『范の犯罪』に至っては、清潔、強烈な自我貫徹の凱歌と見ることができた」と主張し、「大正元年、二年は、志賀文學にとっては、このような時期だったのであり、だから二年の秋、城の崎で〈静かさに親しみを感じた。〉という心持が基調になったことは急変」と述べている²⁾。須藤は、作家論の見地から、『范の犯罪』にみられる自我貫徹の原理と、志賀の城崎体験にみられる心境との隔たりを根據に、『城の崎にて』から作品傾向が自然親和的原理へと大きく変わることを見事に指摘した。

饗庭孝男は、『城の崎にて』について、「電車にはねられたその偶然が生き物の死に対する認識に〈自分〉をみちびき、蜂や蝶蛹の死と〈自分〉の死がそこで自然に同化する」と述べている³⁾。本多秋五は、作品の末尾の箇所と関連して、「自覺的な自我が無意識—個人的無意識と集合的無意識との區別もつかない、混沌とした無意識—のなかに溶解して行く際の昏冥」がみられると言う⁴⁾。小泉浩一郎は、作品の末尾の解釋と関連して、「自我を人類に架橋する〈白樺〉的理念—個と全とを統べる超然的必然的な意志の存在の否定—」があらわれていると指摘する⁵⁾。饗庭と本多は、『城の崎にて』を、語り手「自分」が自我意識を乗り越え、宇宙の秩序に同化していく話と捉えた点で意義深い。これに對して小泉は、『城の崎にて』にみられる「生と死への觀念」を、ユニークに白樺派の理想主義と結び付け論じた。

これらの先行研究は、『城の崎にて』が見せている〈生と死への觀念〉を解釋しようとしたものであるが、作品の根源にある宗教性に深く踏み込んでいない憾を否めない。本論文では、いわゆる「調和的傾向」を代表するこの作品を、語り手「自分」が、三つの動物の死を目撃し、伝統的な日本人の死生觀に近づくことによって、「自己中心主義」「人間中心主義」を克服していく物語として捉え、その妥當性を示したい。

第一節 「蜂の死」と『范の犯罪』との対比にみる死生觀

『城の崎にて』を讀解するためには、語り手でもあり、主人公でもある「自分」の城崎旅行の前提條件について考えてみる必要がある。そして、それを見せてくれるのは、作品の中で、ただひとつ次の引用の箇所だけである。この箇所の直ぐ後から、作品では城崎での「自分」の体験が

2) 須藤松雄『志賀直哉の文學』、南雲堂櫻楓社、1963年、151頁。

3) 饗庭孝男「〈私〉小説とは何か—日本の心性との關わり—」、165頁。

4) 本多秋五『志賀直哉』上、岩波新書、1990年、242頁。

5) 小泉浩一郎「『城の崎にて』—一つの終焉—」、「國文學 解釋と鑑賞」1987年1月、82頁。

述べられている。

山の手線の電車で跳飛ばされて怪我をした、其後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出掛けた。背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、そんな事はあるまいと医者に云はれた。二三年で出なければ後は心配はいらない、兎に角要心は肝心だからといはれて、それで来た。三週間以上—我慢出来たら五週間位居たいものだと考へて来た。(『城の崎にて』、『志賀直哉全集』第三卷、岩波書店、1999年、4頁) 6)

作品の冒頭の上記引用箇所は、次の疑問を抱かせる。それは、なぜ語り手「自分」は、城崎で後養生しなければなかったのか、また、なぜ三週間以上、城崎に滞在したいと思ったのかということである。この点については、宗像和重と池内輝雄の論が大いに参考になる。宗像和重は『城崎町史』（城崎町発行、1988年）の記述を借りて、「日清戦争の不況にあえていた城崎温泉にとって〈起死回生の妙薬〉となったのが、日露戦争の傷病兵療養場の開設であった」と言い、「温泉の薬効もあって傷病兵らの評判もよく、〈治癒して郷里に帰還した軍人達によって城崎温泉の名聲は天下に広った〉」と言う7)。池内輝雄は、城崎温泉の案内書の『但馬城崎温泉案内記』（城崎温泉事務所編輯・発行、1900年）を根拠に、「傷の治療はもとより胸部、脊椎などの病の療養に適するという城崎温泉の効能は、その意味で、まさに〈後養生〉にもってこいのところであつたろう」と推論し、また、「語り手は当初、〈三週間以上—我慢出来たら五週間位居たい〉と滞在日数を予定している。これも案内書の入場日数〈三四週間より短かるべからず〉と符合する」と指摘する8)。宗像和重と池内輝雄の論を総合し、言えるのは、作家志賀直哉に限りなく近い語り手の「自分」が、交通事故の後養生のために城崎温泉への旅行を決心したということには、日露戦争以後の城崎温泉の名聲からも、また、治療の効果が期待できる病気の種類の中に、脊椎などの病気が入っているということからも、それなりの十分な根拠があったということである。「三週間以上—我慢出来たら五週間位居たい」と語り手の「自分」が考えるのも、温泉旅行の期限としては、極めて妥当な期限設定であることがわかる。

しかし、いずれにせよ、語り手の「自分」は決して、城崎温泉への旅行にいたった経緯を詳細に語らない。冒頭の語り手が終わると直ぐ、語り手は、城崎での体験を述べている。そして、城崎での体験の話は、作品の末尾の直前まで延々と續いていく。このような構成を考えると、作品の構造と関連して、自然に作品の冒頭と末尾との関連が浮き彫りになってくる。

6) 以下、『城の崎にて』からの引用の際、作品名と頁数のみを本文中に表記することにする。

7) 宗像和重「遠くへ、そして一人へ—『城の崎にて』私注—」、『國文學』2002年4月、14頁。

8) 池内輝雄「『城の崎にて』論」、田中實・須貝千里編著『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ—文學研究と國語教育研究の交差—』、右文書院、1999年、102頁。

三週間ゐて、自分は此處を去つた。それから、もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かつた。（『城の崎にて』、12頁）

作品の末尾からの引用である。この末尾の箇所は、作品の冒頭と對になっていることがわかる。作品の冒頭部分で、語り手は「交通事故の後養生に城崎に出掛けた」ということと、「三週間以上一我慢出来たら五週間位居たい」ということを述べているが、作品の末尾の部分で語り手は「三週間ゐて、自分は此處を去つた」と述べている。この作品の冒頭部分は、語り手の城崎体験を述べるプロローグであり、作品の末尾の箇所は城崎体験が述べられた後のエピローグになっている。そして、そのプロローグとエピローグは「三週間以上、五週間位居たい」と「三週間ゐて此處を去つた」という相違をみせている。この末尾の箇所を作品の冒頭と比較してみると、次のような疑問が生じる。つまり、なぜ、語り手の「自分」は、「自分」が設定した滞在期間の最小限であった「三週間」だけ城崎に滞在するに止まったのだろうかという疑問、言い換えれば、「自分」は城崎で何を体験し、どのような心境の変化を起こしたのだろうかという疑問が生じるのである。また、「脊椎カリエスになるだけは助かつた」という箇所の含意は何だろうかということである。ある意味で、『城の崎にて』の解釋は、このような疑問にどう答えられるのかに關わっているように思われる。このような問題設定の上で、『城の崎にて』の本格的な考察に入っていくことにしよう。

作品『城の崎にて』での語り手である「自分」の城崎体験は、蜂、鼠、蠐螬という三つの動物の死の話に集約されており、語り手「自分」はその死を通して、「自分」の境遇を振り返っていく。ただし、その前提には、城崎に来る前に交通事故を経験した「自分」の気持ちがある。それゆえ、この作品の分析においては、「自分」の気持ち、その心境の変化を読み取ることが重要である。

では、城崎に到着した「自分」は最初、どういう心境なのか、それをみてみよう。「自分」は、「一つ間違へば、今頃は青山の土の下に仰向けになつて寝てゐる所」（『城の崎にて』、4頁）だつたと思っている。青山は作家志賀直哉の家族墓がある場所であり、作家志賀直哉に限りなく近い「自分」は、交通事故の体験から「死」というものは、そんなに遠いものではなく、いつ死んでもおかしくないのが人生であるという心境になっていることが窺える。このような心境は、また、次のように敷衍されている。

自分は死ぬ筈だつたのを助かつた、何か自分が殺さなかつた、自分には仕なければならぬ仕事があるのだ、—中學で習つたロード・クライヴといふ本に、クライヴがさう思ふ事によつて激勵される事が書いてあつた。實は自分もさういふ風に危ふかつた出来事を感じたかつた。そんな氣もした。然し妙に自分の心は静まつて了つた。自分の心には、何かしら死に對する親しみが起つてゐた。（『城の崎にて』、5頁）

この箇所には、「死」に対する二つの対立する態度があらわれている。一つは、クライヴの態度。もう一つは、「死」に対して親しみを感している語り手「自分」の態度である。

この二つの態度を比較する前に、まず、作者志賀直哉に限りなく近い語り手「自分」が、中學で習ったというロード・クライヴという本について言及したい。この本は、イギリスの歴史家であり、また政治家であったマコーレー (Thomas Babington Macaulay, 1800-1859) が書いた、クライヴの伝記、*Lord Clive: an essay* (1840) を指す。クライヴ (Robert Clive, 1725-1774) はイギリス東印度會社の軍人で、ベンガル知事 (在任期間1757-1760, 1765-1767) であり、第二次カルナータカ戦争で南インドにおけるイギリスの覇権を確立し、1757年のプラッシーの戦いでベンガルの軍事・政治・商業上の支配を達成した人物である⁹⁾。*Lord Clive* は、明治期の日本で上級英語のテキストとして、マコーレー著 *Warren Hastings* (1841) とともに広く使われた¹⁰⁾。『英語教育史資料3-英語教科書の変遷-』 (東京法令出版、昭和53) を参考にすれば、明治期の英語副読本として用いられた *Lord Clive* は、二種あることが確認できる。一つは、明治21 (1888) 年12月発行 (無検定) されたマコーレー著、吉田卯之助発行の *Lord Clive*。もう一つは、明治40 (1907) 年2月25日刊行 (訂正再版は明治40.8.5、検定は明治40.9.14) された鹿島長次朗著、興文社発行の *Lord Clive* ¹¹⁾。志賀直哉は、明治28 (1895) 年9月學習院中等科に入學し、明治35 (1902) 年7月卒業したので、志賀直哉に限りなく近い語り手「自分」の言うロード・クライヴという本は明治21 (1888) 年12月発行の *Lord Clive* と思われる。ここでは、*Lord Clive* の明治期の翻譯本の一つである『印度征略史-原名クライブ公伝記-』 (末廣重恭譯述、東京同盟出版書肆、明治18 (1885) 年) から、『城の崎にて』にみられるクライヴのエピソードにあたる箇所を引用したい。

遂ニ失望ノ余リ死ヲ決シ獨リ筆生ノ室ニ在リテ小銃ヲ裝ヒ己ノ頭天ニ向ツテ之を放つコトニ回ナリシニ如何ナル故ニヤ發彈セズ怪シテ銃中ヲ檢スルニ彈藥ハ充分ニ裝填シタリ是ニ於テ其ノワルレンスタイン氏が死ヲ決シテ死スル能ハザリシ時ト同ジク高聲自ラ呼ンテ曰ク天ノ我ヲ殺サザル者ハ偶然ニ非ズ必ラズ我ヲシテ一大事業ヲ成サシメント欲スルナリト¹²⁾

上記引用の箇所を含め、『城の崎にて』にみられるクライヴの態度は、「死」から救われたのは、神の恩寵であるという態度であり、地上でしなければならない「仕事」があるからだという態度であることがわかる。この立場は、「死」と「生」は對立するものであり、また、「生」の中心

9) 『日本大百科全書』第七卷、小學館、1986年、591頁。
10) 大村喜吉・高梨健吉・出來成訓編『英語教育史資料5-英語教育事典・年表-』、東京法令出版、1980年、79頁、183頁参照。
11) 大村喜吉・高梨健吉・出來成訓編『英語教育史資料3-英語教科書の変遷-』、東京法令出版、1980年、243頁、248頁参照。
12) マコーレー原著、末廣重恭譯述『印度征略史-原名クライブ公伝記-』、東京同盟出版書肆、1885年、15頁。

に位置するのは、「仕事」であるという考え方によって成り立っている。

それに對して、『城の崎にて』の語り手「自分」は死に對して別の態度をとっている。すなわち、彼は自らのうちに「何かしら死に對する親しみ」を感じるのであり、この態度が、「一つ間違へば、今頃は青山の土の下に仰向けになつて寝てゐる所」（『城の崎にて』、4頁）だったと思う「自分」の心境と相通ずるものになっている。しなければならない「仕事」が、「死に對する親しみ」の對立項目として設定されているのであるが、この事實は、ぜひ記憶しておくべきである。この点が、この作品に登場する三つの「動物の死」の中の、最初の「動物の死」である「蜂の死」がもつ意味を読み解く鍵になるように思われるためである。

では、この小説の中で、「蜂の死」は、どのようなコンテキストの上で描かれていくのだろうか。次をみてみよう。

虎斑の大きな肥つた蜂が天氣さへよければ、朝から暮近くまで毎日忙しさに働いてゐた。

（中略）其處で羽根や触角を前足や後足で叮嚀に調べると、少し歩きまはる奴もあるが、直ぐ細長い羽根を兩方へしつかりと張つてふーんと飛び立つ。飛立つと急に早くなつて飛んで行く。植込みの八つ手の花が丁度咲きかけて蜂はそれに群つてゐた。（『城の崎にて』、5頁）

語り手「自分」は「蜂の死」に直ぐ出會うわけではない。最初「自分」に把握された蜂という動物は、毎日生懸命、働く存在である。その姿には、「死」を予感させるものは見当たらない。蜂には、勤勉に仕事に勤む日々が繰り返されているだけである。蜂と言うと、働き蜂という言葉からも連想されるように、普段「仕事」というイメージで捉えられることが多い。そして、働き蜂と働き蟻は、仕事人間として、しばしば隠喩されている。作品の中で、ロード・クライヴ云々という箇所において、「仕事」と「死への親しみ」が對立項目になっていたことを念頭におけば、蜂の働きぶりが長々と書かれていることは、「蜂の死」との對比として、注目される。

では、「蜂の死」はどのようなふうを描寫されているのだろうか。何よりも、目立つところは、「蜂の死」にみられる生きて働いている蜂との對比関係である。

或朝の事、自分は一疋の蜂が玄關の屋根で死んで居るのを見つけた。足を腹の下にびつたりとつけ、触角はだらしなく顔へたれ下がつてゐた。他の蜂は一向に冷淡だつた。巢の出入りに忙しくその傍を這ひまはるが全く拘泥する様子はなかつた。忙しく立働いてゐる蜂は如何にも生きてゐる物といふ感じを与へた。その傍に一疋、朝も晝も夕も、見る度に一つ所に全く動かずに俯向きに轉つてゐるのを見ると、それが又如何にも死んだものといふ感じを与へるのだ。

（『城の崎にて』、5-6頁）

「死んでいる一匹の蜂」と、「生きてゐる蜂」との對比が鮮明にあらわれている。死んでいる蜂は、「足を腹の下にびつたりとつけ、触角はだらしなく顔へたれ下がつて」いる慘めで可哀想な

姿をしている。如何にも死んだもののような姿をあらわしている足と触角は、生きていた蜂の描写においては、旺盛な仕事ぶりを予告するものであった。生きていた蜂は飛び立つ前に、足で羽根や触角を丁寧にととのえる。そして、蜂が飛び立つということは、蜂にとっては、仕事にでるということの意味する行為である。対比として、さらに注意しないといけないことがある。「死んだ蜂」は一匹であるのに對して、「生きていた蜂」は、群れであるという対比関係である。これは、勿論「死」というものは、生き物において、まったく孤獨な出来事であることを意味するものである。それは、生き物に共通する、生まれながらの条件であり、運命である。ある生き物の「死」は、まったくその生き物に限っての出来事である。そのようなことが、死んだ一匹の蜂にあまりにも冷淡な「蜂の群れ」という対比関係を成していると解釋すべきである。

働き蜂が仕事人間の隠喩として、しばしば用いられるのはすでに指摘した。それに加えて、この作品の中では、蜂というものが、人間の隠喩であることを指摘したい。この作品の中で、語り手「自分」は、「蜂の死」から、「殺されたる范の妻」を連想する。次をみてみよう。

忙しく忙しく働いてばかりいた蜂が全く動く事がなくなつたのだから静かである。自分はその静かさに親しみを感じた。自分は「范の犯罪」といふ短篇小説をその少し前に書いた。范といふ支那人が過去の出来事だつた結婚前の妻と自分の友達だつた男との関係に對する嫉妬から、そして自身の生理的壓迫もそれを助長し、その妻を殺す事を書いた。それは范の氣持を主にして書いたが、然し今は范の妻の氣持を主にし、仕舞に殺されて墓の下にゐる、その静かさを自分は書きたいと思つた。

「殺されたる范の妻」を書かうと思つた。それはたうとう書かなかつたが、自分にはそんな要求が起つてゐた。其前からかかつてゐる長篇の主人公の考とは、それは大変異つて了つた氣持だつたので弱つた。（『城の崎にて』、6-7頁）

作品の中で、注目すべき言葉の一つに「静かさ」がある。この言葉は、「淋しさ」という言葉とも連動している。ここでは、まず、「静かさ」という言葉が、「死」のイメージと連動し、「仕事」という言葉と對立するということを指摘したい。語り手の「自分」にとって死後の世界というのは、何もすることのない世界であり、言い換えれば、静寂の世界である。そして、その〈静寂の世界〉に對立するのは、毎日毎日「忙しく忙しく」働かなければならない〈現實の人間世界〉であると「自分」は認識している。忙しく働く蜂の世界は、忙しく働く人間の世界と同一視されているのである。

このように把握した際、なぜ、語り手は、「死んでいる蜂」を見て、「殺されたる范の妻」を連想するのかについて考察しなければならない。いったい「死んでいる蜂」と「殺されたる范の妻」は、どのような一致点があるのだろうか。上記引用において、その一致点の一つの繋がりから見出すことができる。それは、「死んでいる蜂」も、「殺されたる范の妻」も、死後の静かな世界に

おかれた存在だということである。しかし、ここで、疑問が生じる。なぜ、そんなに語り手の「自分」は、「静かさ」にこだわっているのだろうか、ただ単に、静寂の世界を賛美しているのに過ぎないのではあるまいかという疑問である。その疑問を解決するために、もう一度、上記引用の対立項目を確認しなければならない。

上記引用の箇所に対立項目の筆頭にあるのは、「生きている蜂の世界」対「死んでいる蜂の世界」という対立項目である。ただし、「生きている蜂」を表象するのは、「忙しく忙しく働く仕事」ということであり、これに對して、「死んでいる蜂」を表象するのは「静かさ」である。このように、「生」を「仕事」に結び付け、また「死」を「静かさ」に結びつけるのは、言うまでもなく、語り手の「自分」なりの、「生と死」に對するイメージによる。ところで、「死」を「静かさ」に結び付けて考えることは、その捉え方が死に對する否定的な捉え方だとは言い難い。むしろ「忙しく忙しく働く」という生の捉え方こそ否定的な捉え方だと言ったほうがいい。上記引用の「忙しく忙しく働いてばかりいた蜂」という箇所において、「忙しく忙しく」と「忙しく」が二回反復されていること、また「働いてばかり」と言っていることは、明らかに「仕事」ひいては「生」に對する否定的な捉え方の表れであるといえよう。

ここで、次の対立項目の検討にうつりたい。それは「范の犯罪」対「殺されたる范の妻」という対立項目である。すでに語り手が書いたとされている小説「范の犯罪」と、書きたい小説とされている「殺されたる范の妻」という対立項目は、なぜ設定されているのか、また、それが、「蜂の死」と、どのような關連があるのかは分かりにくい。でも、「殺されたる范の妻」が、「死んだ蜂」同様、死の静かさを表象していることは明らかである。となると、「生きている蜂」に相當する人物は范であることも明確になってくる。「生きている蜂」の屬性と范の屬性が一致すると語り手の「自分」は考えているのだろう。「生きている蜂」は、「忙しく忙しく働くばかり」の存在であった。これに對して、范は、「〈妻への嫉妬〉と〈生理的壓迫〉から妻を殺す」人物である。ということは、「忙しく忙しく働くばかり」の存在と、「〈妻への嫉妬〉と〈生理的壓迫〉から妻を殺す」人物は、同じ屬性をもっているという話になるのであろう。

でも、「忙しく忙しく働くばかりの蜂」と「妻への嫉妬と、生理的壓迫から妻を殺す范」が、なぜ、語り手の「自分」に同一視されるのかは納得がいかない。その脈絡を理解するためには、『范の犯罪』という小説がいったい何を物語っているのかを再検討しなければならない。というのは、作家志賀直哉に限りなく近い語り手の「自分」が、『范の犯罪』という小説について述べる時、それは、他ならぬ志賀直哉の作品『范の犯罪』を指すからである。果たして語り手の「自分」が述べている「妻への嫉妬」と、「生理的壓迫」というものは、志賀直哉の作品『范の犯罪』において、どういうものを意味するのだろうか。その解釋の手がかりになるところが作品『范の犯罪』の中に存在する。次をみてみよう。

中毒しきつた時は自分はもう死んで了ふのだ。生きながら死人になるのだ。自分はさういふ所に立つてゐるのに尙それを忍ばうといふ努力をしてゐるのだ。そして一方で死んでくれればいい、そんなきたないやな考を繰返してゐるのだ。其位なら、何故殺してはしないのだ。殺した結果がどうなうとそれは今の問題ではない。牢屋へ入れられるかも知れない。しかも牢屋の生活は今の生活よりどの位いいか知れはしない。其時は其時だ。其時に起ることは其時にどうにでも破つて了へばいいのだ。破つても、破つても、破り切れないかも知れない。然し死ぬまで破らうとすればそれが俺の本統の生活といふものになるのだ。（『范の犯罪』、272-273頁）

范は演芸の前日、眠れないまま、上記引用のように考える。ここには、范が「妻が結婚前、その従兄と関係したこと」に対する嫉妬を克服しようと努力はしてきたが、その結果、范自身の生活が「生きながら死人」になるような生活になっていることに気付いたことが明らかになっている。そして、今の生活から抜け出し、「本統の生活」を営むためには、「妻を殺し、牢屋に入れられるほうがまだ」という恐ろしい結論に至る思考のプロセスが明らかになっている。勿論、このような極端な結論は、正常な思考によっているものではない。「妻の結婚前の関係により、行きづまった夫婦の関係」に悩み、不眠の状態に落ちてしまった「生理的壓迫」によって正常な思考ができなくなったことに大いに関連しているのである。

上記引用において、范の目指すところは「本統の生活」であり、結局のところ、その「本統の生活」の中身が何であるかが問題になってくる。それは、范自身の行きづまった結婚生活を清算した上での新しい生活であり、それによって生きているということが実感できる生活である。しかし、「本統の生活」を営むためには、「妻を殺し、牢屋に入れられるほうがまだ」という范の恐ろしい考え方は、「本統の生活」を目指す倫理的根拠が、自分の意味のある人生のためには他人の犠牲があってもかまわないという考え方であり、その哲學はまったく「自己中心的」である。そして、范の「自己中心的な」哲學の犠牲者になっているのが范の妻であるが、『城の崎にて』の語り手「自分」は、「范の犯罪」の結果として地下で静かに眠っているだろう「范の妻」に同情しているのである。これは、『城の崎にて』の語り手「自分」が、范の「自己中心主義」の哲學に反發し、どんなに意味のある人生を営みたい場合でも、周囲の人を犠牲にしてはいけないという哲學をもっていることを意味する。

このように考えた際、『城の崎にて』の語り手「自分」が、「仕事に忙しい蜂」と「范」を同一視し、また、「死んでいる蜂」と「殺されたる范の妻」を同一視するコンテキストが理解できる。語り手「自分」によれば、「仕事」というものは、もっといい生を目指すための究極的な歸結点であり、その仕事に没頭するということは、個別の生き物の存在意味を確認する行為にほかならない。そして、個別の生き物の存在意味を確認する行為は、自分を何よりも大事に思うという点において、「自己中心主義」の哲學に相通じると考えているのであろう。これに對して、「死んでいる蜂」は、「仕事に熱心な蜂の群れ」にはまったく關心の對象ではなくなっている。「死ん

でいる蜂」は、仕事とは無関係にただ静かであるだけである。一方、「殺されたる范の妻」は、「自己中心主義」の極端な実践者であった范に殺され、墓の中で静かに眠っているのである。「死んでいる蜂」は仕事に熱心な蜂たちには冷遇されており、「殺されたる范の妻」は范の「自己中心主義」の犠牲者になっている。語り手「自分」によれば、「死後の静かさ」は、「仕事」と「自己中心主義」の對極に位置している。死後の静かさに親しみを感じている作家志賀直哉に限りなく近い語り手の「自分」は、「自己中心主義」の哲學から明らかに距離をおいている。

第二節 「鼠の死」と「蝶螈の死」にみる死生觀

この小説において、二番目に登場する動物の死は、「鼠の死」である。「鼠の死」は、「蜂の死骸が流され、自分の眼界から消えて間もない時」（『城の崎にて』、7頁）に起きた出来事である。これは、「鼠の死」が、「蜂の死」の記憶がそのまま鮮明に残っている時の出来事であることを意味するのであり、つまり、「蜂の死」と「鼠の死」はかけ離れた出来事ではなく、「鼠の死」に対する「自分」の認識は「蜂の死」への認識の延長線上にあることを意味する。川へ投げ込まれて、必死になって岸に上ろうとする鼠を見守っている語り手「自分」の鼠への眼差しは、鼠にいたずらをしている子供や車夫のそれとは異なる。語り手の「自分」は、すでに、「范」の立場を擁護せず、「殺されたる范の妻」を同情するようになっており、「死への親しみ」を感じている。したがって、「死への親しみ」を感じていないと考えられる子供や車夫とその立場がどのように違うのかが、「鼠の死」を見守っている語り手「自分」の死生觀を理解する鍵になる。と同時に、「鼠の死」を通して、語り手の「自分」が達する認識は、「蜂の死」の場合と何か異なっているのかも検討しなければならない。

そう考えた際、もっとも目立つ差は「蜂の死」の場合、語り手「自分」は、「死んでいる蜂」を見たのに對して、「鼠の死」の場合、語り手「自分」は「死んでいる鼠」を見るのではなく、「死んでいく鼠」を見ているということである。そして、「死んでいく鼠」を見守る体験は、死と生は斷絶したものではなく、死は生の延長線上にあり、死と生が必ずしも對立するものではないという認識を伴うものである。次をみてみよう。

鼠が殺されまいと、死ぬに極つた運命を担ひながら、全力を盡して逃げ廻つてゐる様子が妙に頭についた。自分は淋しい嫌な氣持になつた。あれが本統なのだと思つた。自分が希つてゐる静かさの前に、ああいふ苦しみのある事は恐ろしい事だ。死後の静寂に親しみを持つにしろ、死に到達するまでのああいふ動騷は恐ろしいと思つた。（『城の崎にて』、8頁）

「蜂の死」の凝視の場面において、「淋しさ」と「動物の死」は連動していた。それは、この

「鼠の死」の場面の凝視においても変わりはない。しかし、上記引用の場面と「蜂の死」の場面は、それぞれ、死に対する視点が微妙に違う。「蜂の死」においては、「死」というものに「静かさ」を感じている「淋しい気持ち」であったのに對して、上記引用の場面においては、「淋しい嫌な気持ち」に襲われ、また「死に至る動騷」が強調されている点が異なる。「死」というものは、ただ単に静寂を意味するものではない。その死に至る過程は苦痛を伴うものである、それは生き物の避けられない悲しい生の条件であるということに気付くのである。「鼠の死」への凝視は、語り手「自分」の死への認識のさらなる深化を意味している。

「蜂の死」と「鼠の死」において、さらに異なる点がある。それは、語り手の「自分」が二つの「動物の死」を見て、何を連想するのかということである。「自分」は、「蜂の死」を見た時は、「殺されたる范の妻」を書きたいという気持ちになった。これに對して、「鼠の死」を見た時は、「自分」の身の上で起った交通事故を連想する。「蜂の死」は、「自分」のある種、抽象的な死への認識と関連しているのに對して、「鼠の死」は、具体的な「自分」の経験と結び付けられ把握されているのである。このことを確認するために、次を引用したい。

今自分にあの鼠のやうな事が起つたら自分はどうするだらう。自分は矢張り鼠と同じやうな努力をしはしまいか。自分は自分の怪我の場合、それに近い自分になつた事を思はないではゐられなかつた。自分は出来るだけの事をしようとした。(中略)

「フェータルなものか、どうか？ 医者は何といつてゐた？」かう側にゐた友に訊いた。「フェータルな傷ぢやないさうだ」かう云はれた。かう云はれると自分は然し急に元氣づいた。亢奮から自分は非常に快活になつた。フェータルなものだと若し聞いたら自分はどうだつたらう。その自分は一寸想像出来ない。自分は弱つたらう。然し普段考へてゐる程、死の恐怖に自分は襲はれなかつたらうといふ氣がする。そしてさういはれても尙、自分は助からうと思ひ、何かしら努力をしたらうといふ氣がする。それは鼠の場合と、さう変らないものだつたに相違ない。

(『城の崎にて』、8-9頁)

上記引用の箇所では、語り手の「自分」は、「鼠の死」をきっかけに、「自分」の交通事故を反芻し、生き物として當然のことながら生の本能をもって、生きようと努力したことを改めて認識している。「自分」でもよくもそのようなことが可能であつたという驚きが表れている。と同時に、「自分」の生き物としての輕薄さへの認識も表現されている。「自分」はフェータルではないという友達の一言に急に元氣になる。これは、「自分」には生きたいという生き物の本能があり、その本能に「自分」の感情も左右されることを意味する。しかし、同時に重要なのは、「自分」がただ単に、「自分」の生き物としての本能に気付いただけではなく、もう一人の「自分」がいることに気付いたことであろう。「自分」には、もし、医者から「フェータルな傷だ」と宣告されても、普段考へている程「死への恐怖」に陥ることはなかつたらうという認識があり、その認識は、運命をすんなりと受け入れたに違いない「自分」への発見につながる。

この場面においては、「鼠の死」への凝視を通して、「自分」が、二つのことを認識したと纏められる。つまり「自分」は、生き物としての生の本能を認識し、また、〈生き物として運命を受け入れるしかないということ〉を認識した。主人公の「自分」は、人間もまた、他の生き物同様、生の本能をもっている存在であり、また、その与えられた生の条件から自由になれないと考えるようになった。ここには、人間も他の動物も、生き物としては同等であるという考え方がみられる。この時点において、語り手「自分」は、「人間中心主義的な考え方」を乗り越えたと理解していいだろう。

一番目の「動物の死」、つまり「蜂の死」を目撃した時の語り手「自分」が、「自己中心主義」を批判していることはすでに把握した。ここでは、『城の崎にて』における「自己中心主義」と「人間中心主義」の関係について考察してみよう。「蜂の死」を凝視し、「范の妻」に同情する語り手の気持ちが「人間中心主義」を乗り越えた立場によるものなのかどうかは不明である。「死んでいる蜂」を凝視し、「殺されたる范の妻」の境遇を考える語り手「自分」は、「死んでいる蜂」と「殺されたる范の妻」に同情をよせていることは間違いない。そして、このような同情が、范に典型的にみられる「自己中心主義」を批判する立場から生じたことは明確である。だが、その同情が、人間も他の動物とまったく同じ状況におかれている存在だという「人間中心主義」を乗り越えた立場に基づいているのかどうかは定かではない。これに対して、語り手は二番目の「動物の死」、つまり「鼠の死」への凝視を通しては、「自分」と他の動物の間の差を認めず、〈人間も他の動物同様、生の本能をもっており、また、与えられた生の条件を受け入れるしかない存在に過ぎない〉という認識、〈人間は他の動物同様、自然の一部である〉という認識をもつようになり、「人間中心主義」を乗り越えていることが見受けられる。要約すれば、語り手「自分」は「蜂の死」の凝視の際は、「自己中心主義」を乗り越え、「鼠の死」の凝視の際は、「人間中心主義」を乗り越えたとと思われる。語り手「自分」が、「自己中心主義」を乗り越え、さらに「人間中心主義」を乗り越えていく過程は、そのまま、語り手「自分」の成長の過程なのである。

では、この作品の中での三番目の「動物の死」への凝視は、何を意味するのかみてみることにしよう。語り手の「自分」は、次のように蟻蝮と出会う。

自分は何気なく傍の流れを見た。向う側の斜めに水から出てゐる半疊敷程の石に黒い小さいものがゐた。蟻蝮だ。未だ濡れてゐて、それはいい色をしてゐた。頭を下に傾斜から流れへ臨んで、凝然としてゐた。体から滴れた水が黒く乾いた石へ一寸程流れてゐる。自分は何気なく、踞んで見てゐた。（『城の崎にて』、10頁）

この場面は、まず、蟻蝮の何気ない生態が描寫されていることに注目しなければならない。語り手「自分」は、何気なく蟻蝮を見つけ出し、その生態に何気なく接する。上記引用の箇所は

「何気なく」存在する自然の秩序を物語っている。自然の中で、全ての生き物は何気なく、生れ、生を営み、いずれ死んでしまう。自然の秩序それ自体に善悪は存在しない。自然の秩序はただ単に存在するだけである。このような語り手「自分」の考え方が、上記引用の箇所でもでて「何気なく」という言葉に表現されていると考えられる。

しかし、ここで、一つ注意しなければならないことがある。それは、上で指摘したような自然の秩序が語られているだけでなく、もう一つの観点がみられるという事実である。それは、「蝶々だ。未だ濡れてゐて、それはいい色をしてゐた」という箇所にみられる、ある種、人間の感覚から捉えられた美の感覚である。自然は自然のままなのに、人間だけは、その自然に好悪の感情を抱く。それは、正しいかどうかとは別の次元のことである。上記引用の箇所において、語り手「自分」は、「自分」なりに蝶々の色が美しいと判断する。その判断の根拠は提示されていない。自然のままの蝶々に美しさを感じ取る語り手「自分」は、ある種、自然に親しむ感情をもっていると言える。語り手「自分」が「死への親しみ」を感じていたことはすでに確認したが、「死への親しみ」を感じている語り手「自分」と、自然に親しむ「自分」には、何の矛盾も存在しない。自然に親しむ語り手「自分」が、蝶々の色を美しいと思うのは当然のことだろう。

このような考察の上で、「蝶々の死」がどのように描寫され、また、語り手の「自分」は、「蝶々の死」を凝視することによって、どのように変化していくのかみとみることにしよう。次を引用したい。

素より自分の仕た事ではあつたが如何にも偶然だつた。蝶々にとっては全く不意な死であつた。自分は暫く其處に踞んでゐた。蝶々と自分だけになつたやうな心持がして蝶々の身に自分になつて其心持を感じた。可哀想に想ふと同時に、生き物の淋しさを一緒に感じた。自分は偶然に死ななかつた。蝶々は偶然に死んだ。自分は淋しい氣持になつて、漸く足元の見える路を温泉宿の方に歸つて來た。遠く町端れの灯が見え出した。(中略)生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは兩極ではなかつた。それ程に差はないやうな氣がした。(『城の崎にて』、11頁)

語り手「自分」は、蝶々を驚かせて水へ入れたいと思い、石を投げた。語り手「自分」はその投げた石を蝶々に命中させようとする意志を少しももっていなかった。しかし、その石は「自分」の意図に反し、蝶々に命中し、蝶々は死んでしまう。この偶然性によって、語り手は、生き物の〈生と死〉について根本から考え直す。

語り手「自分」は、すでに本論文で触れたように、自然の秩序を尊重する人物である。その自然への尊重から「何気なく」する「自分」の行動はそのまま肯定される。「何気なく」「自分」は蝶々に出会い、「何気なく」しゃがんで蝶々を見て、また「何気なく」石を投げた。しかし、その行爲は「自分」の意図に反し、蝶々が死ぬという結果を招く。ここから「自分」は、「何気なく」という言葉に支配される自然の秩序に改めて氣付いたと考えられる。自然は「何気なく」存

在する。「自分」というものもその攝理から逃れることはできない。振り返ってみれば、「自分」は、一步間違ったら死ぬかも知れない交通事故に遭った。もし「自分」が交通事故で死んだとしたら、それは、宇宙のレベルで見れば、ちっぽけなことであろう。しかし、死ぬ当事者にとっては、それは全ての終わりである。「自分」が「何気なく」投げた石によって、蠍は死んだ。しかし、「自分」は、交通事故から運良く生き残った。生き物の存在条件は、全て自然の「何気なさ」によるものなのである。このようなことは、勿論、「自分」の交通事故の経験と蠍の不意の死を同一レベルで考えるという立場によるものである。そして、この同一視が「〈自分〉は偶然に死ななかった」、「蠍は偶然に死んだ」と、「自分」も蠍も、自然の偶然性に支配される存在であることを強調する表現に集約的にあらわれている。この小説の語り手「自分」は、人間も他の動物も、自然の偶然性に支配される存在であることをはっきりと認識するようになった点において、「人間中心主義者」ではなくなった。「自分」は、その思考の中心に人間をおかなくなった。代わりに、その思考の中心に位置するようになったのは、自然や宇宙の秩序なのである。

ここで、一つ確認しなければならないことがある。二番目の「動物の死」である「鼠の死」の場面においても、語り手「自分」は、「人間中心主義」を乗り越えた思考を見せている。「鼠の死」を目撃することによって、語り手「自分」にフェータルなものか起っても、それをすんなりと受け入れようとする立場には、確かに人間も他の動物同様、その運命を受け入れるしかない、というある種の諦念がある。ここにはまた自然の秩序に対する謙虚さがあるのも事実である。これに對して、三番目の「動物の死」である「蠍の死」の場合はどうであろうか。「蠍の死」の場合も、「鼠の死」の場合と同様、「人間中心主義」を乗り越える思考を見せており、また、自然や宇宙の秩序を謙虚に受け入れる姿勢が見受けられる。それに加えて「蠍の死」を凝視することによって、さらなる発見があったように思われる。それは、「自分」の体験を超越した普遍的な宇宙の秩序の発見である。「鼠の死」の凝視の場合においては、「自分」は「人間中心主義」を乗り越え、また、自然の秩序を肯定しているにもかかわらず、それは、「自分」の交通事故の場合を振り返り、「自分」は「自分」の運命を受け入れるという次元のものであった。これに對して、「蠍の死」の場合は、「自分」を他の動物と同一視し、他の動物の痛みをそのまま、「自分」の痛みとして受け入れ、さらに「自分」も、他の動物も逃れることができない生き物の存在の根本条件、〈生と死〉の原理に気付く。この点で「自分」は、「自分」の運命を受け入れるという次元を乗り越え、全ての生き物は、生き物としての〈生と死〉の根本条件を受け入れるしかないように運命づけられていることを痛切に認識したと考えられる。それは個人レベルでの運命への順応ではない。そこには他の生き物と、「自分」とを同一視し、「自分」を他の存在の上におくことのない、眞の意味での「人間中心主義」の克服がみられる。〈生と死〉において、全ての生き物は生きていながらも、いつ偶然に死ぬかわからない弱い存在であるということ、それが全ての生き物が共有する根本条件である。全ての生き物には常に死の影が付きまといている。このことに気が付き、語り手「自分」は、「生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは兩

極ではなかつた。それ程に差はないやうな気がした」と述べているのである。この作品は生き物としての「生と死」の根本条件に気が付き、遂には〈全ての生き物と同一なものとしての「自分」〉、〈自然や宇宙の一部である「自分」〉に目覺めていく物語なのである。

【結び】

以上、『城の崎にて』について考察してみた。しかし、この作品の分析において、まだ残っている問題がある。それは作品の末尾の箇所のもつ意味の分析である。

三週間ゐて、自分は此處を去つた。それから、もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かつた。（『城の崎にて』、12頁）

この作品の分析において、作品の冒頭と對になるこの末尾の箇所の解釋を怠ることはできない。末尾の箇所の眞の意味を読み取ることによってこそ、語り手「自分」が城崎体験を通して至った精神的成長の本質がどういふものなのかを把握することができるだろう。しかし、先行研究において、末尾の箇所の意味は、案外誤解されているように思われる。例えば、池内輝雄は、作品の末尾の解釋に關連し、次のように述べている。

ここで冒頭部の「落ち着きたい気分」を想起するなら、〈現在〉はそこから程遠く、この先どこに進んでいくのか分からない暗く不安定な心的状態であることは明らかであろう。「三週間ゐて、自分は此處を去つた」のは、そうせざるをえないしかるべき理由があつたのである。¹³⁾

池内が上のような主張の根據としているのは、「生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは兩極ではなかつた。それ程に差はないやうな気がした」と、「三週間ゐて、自分は此處を去つた」という箇所の間に位置する「もうかなり暗かつた。視覺は遠い灯を感じるだけだつた。足の踏む感覺も視覺を離れて、如何にも不確だつた。只頭だけが勝手に働く。それが一層さういふ氣分に自分を誘つて行つた」（『城の崎にて』、11頁）という箇所である。池内はこの箇所の解釋と關連して、「生と死のすれすれのところで心とからだから分離し、現實世界を離れて浮遊するような、いわば死の世界にひと足踏み入れたやうな感覺といえる¹⁴⁾」と述べている。ここで、「死の世界にひと足踏み入れたやうな感覺」を指摘する池内の見解に異議を唱えるつもりはない。その見解には同感である。この作品の末尾の箇所が暗い雰囲気になっているという解釋につ

13) 池内輝雄、「『城の崎にて』論」、113頁。

14) 同上、113頁。

いても反対しない。本論文で指摘したいのは、作品の末尾が暗いとはいえ、それは「どこに進んでいくのか分からない不安定な心的状態」ではないということである。ひいては、「三週間も、自分は此處を去つた」のは、方向感覚を喪失したような心的状態に由来するものではないということを指摘したいのである。むしろ、「人間中心主義」を克服した語り手「自分」にとっては、生き方というか生の方向感覚ははっきりと定まったように思われる。

このような点を論証するために、ぜひとも触れたい箇所がある。それは「生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは兩極ではなかつた。それ程に差はないやうな氣がした」の直前の箇所である。次をみてみよう。

死んだ蜂はどうなつたか。其後の雨でもう土の下に入つて了つたらう。あの鼠はどうしたらう。海へ流されて、今頃は其水ぶくれのした体を塵芥と一緒に海岸へでも打ちあげられてゐる事だらう。そして死ななかつた自分は今かうして歩いてゐる。さう思つた。自分はそれに對し、感謝しなければ濟まぬやうな氣もした。然し實際喜びの感じは湧き上つては來なかつた。生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは兩極ではなかつた。それ程に差はないやうな氣がした。

(『城の崎にて』、11頁)

この箇所には、この作品において、語り手でもあり、主人公でもある「自分」が経験した三つの「動物の死」の凝視に對する「自分」なりの總決算があらわれている。「蝶螻の死」を目撃した時点における語り手「自分」の振り返りがある。蝶螻と對比される存在として、蜂、鼠、「自分」という三つの生き物との比較が行われている。その比較はいろいろな角度から行われている。まず、死んだ生き物として、蜂と鼠がいる。蜂は、土のような存在になつただらう。鼠は塵芥のような存在になつただらう。このように語り手「自分」が考えていることが窺える。これは、蜂も鼠も、自然の循環のサイクルにおかれていることを意味する。蜂と鼠が死んでしまい、土のような存在、塵芥のような存在になつたのに對して、「自分」は生き残つた。しかし、「自分」にはいつ死ぬかわからないという實感がある。それは、山の手線の電車で跳ねられた「自分」の体験に加えて、「蜂の死」、「鼠の死」、「蝶螻の死」を目撃することによって、獲得された實感である。そのような實感をもっている時、「生きていること」に感謝の氣持ちをもつようになつても、喜びの感じが湧き起こらないのは當然の歸結だらう。すでに、「生きて居る事と死んで了つてゐる事」に根本的な差はないという結論にいたつていたのである。

ここで、作品の末尾の解釋に入りたい。語り手の「自分」は、當初予定した滞在期間の最小限である「三週間」だけ、城崎に滞在するに止まつた。これは、三週間以上、留まる必要がなくなつたことを意味する。温泉治療の効果は三週間で期待できる。しかし、作品の冒頭に「三週間以上―我慢出來たら五週間位居たいものだと思つて來た」とあるように、三週間以上滞在すれば、もっと温泉治療の効果期待できるのは言うまでもない。にもかかわらず、語り手「自

分」は、三週間だけ留まった。なぜ、もっと留まらなかったのか。それについては、作品の中に一言も書かれていないが、語り手「自分」が、城崎体験からこれ以上城崎に留まる必要がないという判断を下したためであるに違いない。城崎での体験の中核をなすのは三つの「動物の死」への凝視と「自分」の交通事故体験の反芻にはかならない。そして、それらを通して、語り手「自分」は、蜂も鼠も蝶蛸も「自分」も自然の循環のサイクルにおかれているということ、「自分」はいつ死んでもおかしくない一個の生き物に過ぎないということに気付いたと考えられる。このように気付くことによって、「自分」は、温泉療法に執着する必要がなくなったのであろう。「自分」は、一個の生き物として、「自分」の〈生と死〉についての執着を捨て、「自分」の〈生と死〉を、他の動物同様、自然や宇宙の秩序にすんなりと任せようとする心境にいたったのであろう。その結果として、「自分」は三週間城崎温泉に留まっただけだったと思われる。

最後に、この作品の末尾の最後の二つの文を吟味したい。「それから、もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かった」という文章であるが、この文章も、作品の冒頭「背中の傷が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、そんな事はあるまいと医者に云はれた。二三年で出なければ後は心配はいらない、兎に角要心は肝心だからといはれて、それで来た」の對になっている。この最後の二つの文章のもつ意味は、語り手「自分」が、脊椎カリエスにならなかった安堵感を表したものとして誤解されやすい。そのような見解を代表するものとして中村光夫の見解を紹介したい。

この短篇が大正六年、すなはち彼が實際そこに遊んでから四年後に書かれたのは、終わりの一行に書かれてゐるやうにその怪我が脊椎カリエスになる危険は二三年のうちだけなので、彼が實際にその災厄から逃れたことがはつきりと解つたからはじめて筆をとつたのだと思はれます。「それからもう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。」といふ結びの一句は作者が縁なほしのつもりで附加したものでなければ、まったくの蛇足で、この無邪氣なエゴイズムは微笑を誘ひますが、それだけにここでいくつかの小動物の生死について主人公の動かした感情は、その表白に或る恐怖を覺えたほど作者にとつては切實な實感であつたと思はれます。¹⁵⁾

上記引用において、「彼」は作者志賀直哉を指すものであるが、この作品の語り手「自分」は限りなく作家志賀直哉に近いので、それはそれでいいだろう。問題は中村の解釋の趣旨である。上記の中村光夫の見解の趣旨は、「志賀が、城崎体験において、小動物の死を体験し、その体験は恐怖を覺えるほど強烈で、志賀は、脊椎カリエスになる可能性がなくなるまでは城崎体験を作品化することができなかった。そこには、もっと生き延びたいという無邪氣なエゴイズムがみられる」ということになると考えられる。しかし、この見解は正しいのだろうか。この作品の語り手「自分」の末尾にみられる心境は、もっと生き延びたいという「無邪氣なエゴイズム」の表現

15) 中村光夫『志賀直哉論』、文芸春秋新社、1954年、101頁。

なのだろうか。この作品の末尾の解釈と関連し、もう一つ紹介したい見解がある。それは本多秋五の見解である。本多は末尾の箇所について、「事務的な文句が付け加えられている」と言い、また、「これが新しい自己への脱皮を完了して新しい世界に踏み出した作者の、聲に出さない凱歌である」と述べている¹⁶⁾。

本論文では、すでに述べたように、語り手「自分」は、三つの「動物の死」を凝視することによって、「自己中心主義」「人間中心主義」を克服していったものと考えているので、本多の言うような「新しい自己への脱皮云々」という見解には同感である。ただし、指摘したいのは末尾の箇所の文章は、本多の言うような「事務的な文句」でもなく、また、中村の言うような「蛇足」でもなく、また、「無邪気なエゴイズム」の表現でもないということである。

作品の末尾の箇所は次のように解釈すべきだと考える。

「自分」は三週間ただけで、城崎に長くは滞在しなかった。「自分」は確かに温泉治療のために、城崎に来たのであるが、実際に城崎で三つの「動物の死」を目撃する経験をする中で、「自分」には予想もしなかった変化が起ってしまった。「自分」は温泉治療なんかには執着しないようになった。「自分」は、「自分」が生も死も偶然性に支配される一個の生き物に過ぎないということに気が付き、もっと生き延びようと焦らなくなった。「自分」は〈生と死〉をすんなりと自然や宇宙の秩序に任せたいという気持ちになった。それで、三週間滞在しただけで、城崎を去った。そして、3年過ぎた。「自分」は脊椎カリエスにはならなかった。それは、それで感謝したい気持ちである。しかし、たとえ「自分」が脊椎カリエスになったとしても、「自分」はその結果もまた自然や宇宙の攝理として受け入れたに違いない。「自分」はそのような確信をもつように変わったのである。

作品の末尾の箇所には、以上のようなメッセージが含意されているのではないか。語り手「自分」が達した心的境地は、到底「無邪気なエゴイズム」と、言ってしまうものではない。語り手「自分」は完全に「自己中心主義」と「人間中心主義」を克服し、明らかに新しい生き方に目覚めたと思われる。

作品にみられる語り手「自分」の新しい生き方への目覚めは、宗教と結びつけて論じる必要がある。というのは、この作品の中に宗教との関連が露わな形であらわれてはいないが、語り手「自分」がみせている死生観は、ある種宗教的な色合いをもっているからである。宗教に関連させて、『城崎にて』を考える時、この作品の語り手「自分」は、確かにある種の悟りを開いたと言える。しかしそれが、悟りという直ぐ連想される「禪の悟り」のようなものではないことは確かであろう。語り手「自分」は、自然の循環論の秩序を認めてはいるものの、業（カルマ）という観点から、循環論の秩序を読み取るように変化してはいない。また、欲望を完全に捨てることによって、輪廻轉生から解放され、涅槃に入るという考え方も見せていないのである。この小説を仏教的な悟りと結び付け、論じることは、如何にも無理な解釈になるだろう。この作品にみ

16) 本多秋五『志賀直哉』上、243頁。

られる宗教性の核心は、何よりも、語り手「自分」の死生観にある。本論文では、死生観を四つのタイプに分類している廣井良典の論に據り、この作品の「死生観」は、伝統的な日本人の死生観に近いことを指摘したい。

廣井良典は、「死」と「私〈あるいは自我〉」との関係は、次のように整理できると述べる。

- (A) 肉体は滅んでも「こころ」あるいは「たましい」は存在し続ける
- (B) 死んだら「自然」（生命、宇宙）に還り、かたちを変えて存在し続ける
- (C) 私自身の意識はなくなるが、かたちを変えて輪廻轉生を続ける
- (D) なんらかのかたちで「永遠の生命」を得る（仏教やキリスト教）¹⁷⁾

廣井は、上記分類に續いて、(A)は「心身二元論」であり、また、〈靈魂不滅〉の考えであると言ひ、(B)はある意味で日本人に親和的な見方（あるいは世界の多くの伝統的信仰に親和的な發想）だと述べる。さらに、(D)は仏教やキリスト教といった高次宗教がそろって到達したような死生観=時間観=自然観であると言う¹⁸⁾。

『城の崎にて』にみられる死生観は、上記の分類の中で、(B)に屬すると考えられる。この作品の語り手「自分」は、「死んだ蜂は土の下に入ってしまったろう」と推測し、また、「死んだ鼠は塵芥と一緒に海岸へでも打ちあげられているだろう」と推測する。これは、本論文ですでに指摘したとおり、死んだ蜂と鼠が、土や塵芥のような存在になり、自然の循環のサイクルにおかれていることを意味するのである。ここにみられる死生観は、死んだ生き物は形を変え、自然や宇宙の中で生き続けるといった、上記引用の(B)に屬する死生観なのである。したがって、語り手「自分」が見せる死生観は、日本人に親和的な觀點と言える。

この作品は、城崎体験を通して、「人間中心主義」を克服し、自然や宇宙の秩序に氣付き、その秩序に〈生と死〉をすんなりと任せたい氣持ちへと変化していく、語り手「自分」の精神的成長の記録として讀めるのであるが、その精神的な成長はまた、伝統的な日本人の死生観や自然観、また宇宙観への回歸をも意味するものなのである。

17) 廣井良典『死生観を問いなおす』ちくま新書、2001年、212頁。

18) 同上、212頁。

【参考文献】

- 饗庭孝男 「〈私〉小説とは何か—日本の心性との関わり—」、『文學界』、1982年2月、165頁
- 池内輝雄 「『城の崎にて』論」、田中實・須貝千里編著『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ—文學研究と國語教育研究の交差—』、右文書院、1999年、102頁
- 大村喜吉・高梨健吉・出來成訓編『英語教育史資料3—英語教科書の変遷—』、東京法令出版、1980年、243頁、248頁
- 大村喜吉・高梨健吉・出來成訓編『英語教育史資料5—英語教育事典・年表—』、東京法令出版、1980年、79頁、183頁
- 小泉浩一郎 「『城の崎にて』—一つの終焉—」、『國文學 解釋と鑑賞』1987年1月、82頁
- 小林英夫 「文体論から見た志賀直哉」、日本文學研究資料刊行會編『日本文學研究資料叢書 志賀直哉』、有精堂、1970年、129頁
- 『志賀直哉全集』第二卷、岩波書店、1999年、272-273頁
- 『志賀直哉全集』第三卷、岩波書店、1999年、4頁-12頁
- 須藤松雄『志賀直哉の文學』、南雲堂櫻楓社、1963年、151頁
- 『谷崎潤一郎全集』第二十一卷、中央公論社、1968年、177-180頁
- 中村光夫『志賀直哉論』、文芸春秋新社、1954年、101頁
- 『日本大百科全書』第七卷、小學館、1986年、591頁
- 廣井良典『死生觀を問いなおす』ちくま新書、2001年、212頁
- 本多秋五『志賀直哉』上、岩波新書、1990年、242頁
- マコーレー原著、末廣重恭譯述『印度征略史—原名クライブ公伝—』、東京同盟出版書肆、1885年、15頁、113頁
- 宗像和重 「遠くへ、そして一人へ—『城の崎にて』私注—」、『國文學』2002年4月、14頁

要 旨

志賀直哉は、大正3年4月、『兒を盗む話』を雑誌『白樺』に発表してから約3年間、文學的沈黙期に入る。志賀の作家としての活動は、大正6年5月、『城の崎にて』を雑誌『白樺』に、また、同年6月『佐々木の場合』を雑誌『黒潮』に発表することによって再開される。さらに志賀は、同年9月、父との和解を達成し、10月には父との和解の顛末を作品化した『和解』を雑誌『黒潮』に発表している。このように『城の崎にて』は、志賀の文學的生涯の中では、約3年間の文筆活動の休止期を終え、新しく旺盛な作家活動に入ることになった最初の作品である。そして何より注目されるのは、この作品から傾向の変化がみられるという点である。多くの志賀研究者たちは、『城の崎にて』以降の志賀の作品傾向を「調和的傾向」と呼んでいる。

ところで、『城の崎にて』についての先行研究は、この作品が見せている〈生と死への観念〉を解釋しようとしたが、作品の根源にある宗教性に深く踏み込んでいない憾を否めない。本論文では、いわゆる「調和的傾向」を代表するこの作品を、語り手「自分」が、三つの動物の死を目撃し、伝統的な日本人の死生観に近づいていく物語として捉えた。

この作品の語り手「自分」は、「死んだ蜂は土の下に入ってしまったろう」と推測し、また、「死んだ鼠は塵芥と一緒に海岸へでも打ちあげられているだろう」と推測する。これは、死んだ蜂と鼠が、土や塵芥のような存在になり、自然の循環のサイクルにおかれていることを意味するのである。ここにみられる死生観は、死んだ生き物は形を変え、自然や宇宙の中で生き續けるといった死生観なのである。したがって、語り手「自分」が見せる死生観は、日本人に親和的な観点と言える。

この作品は、城崎体験を通して、「人間中心主義」を克服し、自然や宇宙の秩序に氣付き、その秩序に〈生と死〉をすんなりと任せたい気持ちへと変化していく、語り手「自分」の精神的成長の記録として讀めるのであるが、その精神的な成長はまた、伝統的な日本人の死生観や自然観、また宇宙観への回歸をも意味するものなのである。

キーワード：何気なさ、循環のサイクル、運命、死生観、自然観、宇宙観

투 고 : 2005. 11. 30

1차 심사 : 2005. 12. 10

2차 심사 : 2005. 12. 31

住 所 : (446-943) 경기도 용인시 기흥구 언남동 490번지 신일아파트 106-702

電 話 : 010-3310-5545

e-mail : kgsiga321@hanmail.net